

華嚴思想いろいろ

森本公誠

目次

はじめに

一、聖武天皇の『華嚴経』理解

(一) 『華嚴経』との出会い

(二) 『華嚴経』理解の深化

(三) 華嚴思想の具現化

(四) 歓喜と感謝

二、盧舎那仏は光で語る

(一) 盧舎那仏（毘盧遮那）は光のほとけ

(二) 釈迦即毘盧遮那

三、一つがすべてであるという思想

(一) 『華嚴経』

(二) 哲学者と文学者

(三) 極限への視点

キーワード…華嚴経、聖武天皇、盧舎那仏、東大寺大仏、華嚴思想

はじめに

担当者の方から最初は仮の題として、「華嚴思想と世界文明」をいただきましたが、世界文明ということになる、全部網羅しないとけません。なるほど、華嚴の思想というのはそれほどの広がりもある思想でありますけれども、本日は「華嚴思想いろいろ」という演題でお話をさせていただきます。

一、聖武天皇の『華嚴経』理解

(一) 華嚴経との出会い

ご承知の方もいらっしゃると思いますが、来年は奈良で平城遷都一三〇〇年という記念すべき年を迎えます。この平城京の時代というのは、中国の唐の律令制を手本にしながらも、日本独自の「大宝律令」という法を制定しまして、初めて法に基づく政治、いわゆる法治国家の樹立を目指したという点で、日本の歴史においても非常に画期的な時代であります。実質的には平安の半ばごろまで、この律令制は有効性を持っていたわけですが、時代の変化とともに次第に忘れられていきました。しかし法治国家という点で、現代とも繋がる考え方を持っていた時代でありました。

この国家におきましては、主権者はもちろん天皇でございます。現在の民主主義というのは、主権

在民ということ、人類の歴史でも非常に新しい政治体制であります。律令制のなかでは天皇が主権者であります。天皇は国土を立派に治め、そこに住む人民を慈しむ責任がございます。即位をするときに宣命（せんみょう）と言いますが、今の言葉では「お言葉」ということになるのでしょうか、自分はこういう訳で天皇の地位に就くことができた、それは天皇家の先祖の方々の霊（皇祖神）のお陰であると言って、主権の由来でありますとか、自分は立派に国土を治める、そういう政治をするとかを宣言するのです。ついでに人民（当時の言葉では「あめのしたのおほみだから」、漢字では「天下公民」）を、頭をなでるがごとく慈しむ、そういう政治をやる。そして人民にとって自分は父母のような、親のような関係にある、と。そのような政治の意識と思想をもって即位するのであります。昨今、政権交代がありまして、マニフェストという言葉がよく言われますが、当時のマニフェストですね。

現在、奈良で大極殿の復元工事が進んでおり、ほぼ出来上がりつつあって、来年の三月に竣工ということになっていきます。この建物に天皇が出て、その前庭に皇太子以下の皇族や文武百官、それができる範囲内の人民の代表が参集しまして、天皇の宣言文、宣命を聞くわけです。当時は拡声器がありませんから、天皇自身が言っただけでは聞こえないというので、天皇に代わる宣命使が大きい声でみんなに聞こえるように読み上げます。しかし、如何に大きい声で言っても、たかだか集まっている人たちに聞こえるだけではないか、一般の人民には知らされないと思われるかもしれません、そうではなくて、直ちに駅馬を使って全国に触れ回ります。そういう政治システムがこの時代にちゃんとできているのであります。

この時代を象徴する天皇というと、聖武天皇ということになるでしょう。皆さまご存じとは思いますが、聖武天皇は全国に国分寺・国分尼寺を建て、都の国分寺、これは後の東大寺ですが、東大寺に盧舎那大仏を造立したことで有名です。

なぜそのような政策を行ったかという点、それは天皇の治世の前半、年代的には天平四年（七三二）から天平九年（七三七）までの六年間に、天変地異や天然痘の大流行など大変な時代が続いて、人民は悲惨な状態に追い込まれた、そのようなことを受けてのことと言えるでしょう。

一種の飢餓状態に入りますと、人間は何をするか分からないという状況が生まれます。生きていくためには人の物を盗んででも、とにかく生きていかねばならない、それで牢屋は罪人であふれていると、聖武天皇は詔で述べられています。天皇は為政者として、如何にして人民を救うかを考え、そのための手段として、国分寺や大仏を建立しようとしたのであります。

聖武天皇の政治の基本方針は、当初皇太子時代に学ばれた帝王学によっておりました。それは儒教の経典ならびに中国の歴史書、これらをまとめて「経史」と言いますが、これに基づいて、いわゆる皇帝としての徳、仁徳の徳をもって治める、徳治主義でおやりになりました。しかし、今申し上げたように旱魃・飢饉・地震といった災害や疫病の流行が度重なりますと、徳でもって治めるというのは、人民をすべて救うということはできない、そのように考えられて、「釈教」、つまりお釈迦さんの教え、仏教思想に基づく政治に方針を切り替えられます。

その具体的なプロジェクトとして、国民の精神的な支柱、国民の心の支えになることを考えられるのです。なるほど現実的には、お米を支給するとか、あるいは高齢者や身障者を保護するとか、例えば年が六十一歳以上で奥さんのない人、鰥（かん）といいます——そういう人たちとか、五十歳以上で夫を亡くした人とか、あるいは十六歳以下のみなし子であるとか、そういう人たちに対して、生活が成り立つようにと、折に触れて恩勅を下されます。

しかし、お米を支給して救うというだけではやはり足りない。天皇の役割というのは、心の救いというのが一番大事なことなのだというわけで、今申し上げた二つのプロジェクト、国分寺・国分尼寺の建立と、大仏の造立を打ち出されるのです。

一 仏教に基づく政治ということは、当然のことながら、具体的にはその根拠になるお経の存在があります。国分寺の方は『金光明最勝王経』というお経、それから大仏の造立の方は『華嚴経』というお経です。

お経というのは、本来はお釈迦さんが人を救うために、相手の能力や素質を考慮しながら説かれた教えであります。そのような意味で、『金光明最勝王経』——東大寺では金光明（きんこうみょう）と言いますが、一般的には金光明（こんこうみょう）という言い方をします——これは誰のために説かれたかと言いますと、国王のような支配者のために説かれた教えです。一方、『華嚴経』の方は人々の救済を使命とする、いわゆる菩薩たちのために説かれたお経です。菩薩といえは観音菩薩とか弥勒菩薩などが思い起こされるかもしれない、あるいは猷身のボランテアでもいいでしょう。そういう菩薩たちであっても、それなりの悩みを抱えており、お釈迦さんがそういう菩薩たちのために説いたのが『華嚴経』だということです。

『金光明最勝王経』は八世紀初めにインドの言葉から漢訳されましたが、これには『金光明経』というもっと古い時代に訳された経典があつて、すでに天武天皇、それから皇后の持統天皇の時代に、すばらしい教えだということで、写経して全国に流布させました。このことを当然のことながら聖武天皇も知っておられた。

ところが『華嚴経』の方はまだあまり知られていなかった。『日本書紀』に続く国家編纂の歴史書である『続日本紀』によりますと、養老六年（七二二）の十一月に、元正天皇が自分のお母さんの元明天皇の一周忌の供養として、『華嚴経』八〇卷、『大集経』六〇卷、『涅槃経』四〇卷、その他のお経を写させたという記録があり、これが『華嚴経』について触れている最初の記録であります。

この八〇卷本の『華嚴経』は、七世紀の終わりに漢訳されたもので、ときの則天武后がこれに序文

を寄せております。この当時、中国では法蔵という人がおり、華嚴思想について則天武后に講義を行っております。皇帝自身が序文を寄せたわけですから、『華嚴経』は権威があるというので、隣国の新羅では中国に僧侶を派遣し、『華嚴経』を学ばせました。とくに法蔵の兄弟弟子であった義湘は、新羅の政治にこの華嚴の思想を採り入れさせました。それほど、中国でも新羅でも華嚴教学が盛んになったのです。

実はこの八〇巻本『華嚴経』は新しく翻訳されたもので、古くはすでに五世紀の初めに漢訳されていて、こちらの巻数は六〇巻でした。どうして二〇巻増えたかと言いますと、もともと原典と同じであれば増えるはずがないのですが、不思議なことに経典が伝承されていくにつれ、いつの間にかいろんな考えや言葉が付け加えられたようです。日本にこの旧訳の『華嚴経』がいつ伝来したかはよくわかりません。

『統日本紀』の養老六年のあと、『華嚴経』について知ることができるのは、天平三年（七三二）、聖武天皇が三十一歳のときに書写されたものに出きます。聖武天皇は二十四歳で即位されますが、即位されてからも、政治とはいかにあるべきか、どういう政治をすればよいか、つねに政治の指針を求めて勉強を続けられました。それには思想を学ぶだけではなく、言葉というものが大事だということとで、中国の人が書いた文例についても勉強されたようです。

正倉院には聖武天皇自身が書かれた『雑集』一卷が現存しております。最初の部分は欠けていますが、非常に長いものでありまして、まるでお経のように一行一八字詰め、行数ですと一二〇〇行にわたって、約二万一〇〇〇字がほとんど何の乱れもなく、びっしり書いてございます。

非常に細い線で書かれていますので、聖武天皇という方は神経が細い方だと評する人が多いのですが、しかし二万字も書くとうると、細筆ですらすら書かないと時間がかかってしまいます。最後まで丁寧に、乱れを感じさせずに書いておられるという、その根気たるや驚嘆に値します。内容は、中

国の詩文一四五首からなっていて、首題が雑多であることから『雜集』と呼ばれているのです。末尾に奥書があり、「天平三年九月八日写了」と書かれています。

この一四五首の詩文の一つが「盧舎那像讚一首并序」というもので、これは聖武天皇による『華嚴經』理解の第一歩だと考えられます。中国の越州、今の紹興という地方都市の僧侶に釈靈実（しゃくりょうじつ）という人がいまして、この人は八世紀前半の名文家で、その土地の役人や紳士、僧侶などの求めに応じて綴った文例集とも言うべき『鏡中集』一〇巻を著しました。鏡中というのは紹興という地名の雅称です。正倉院文書のなかに、『鏡中集』一〇巻と書名を記したものがありますので、余り年代を置かず日本に伝わったようです。聖武天皇はこの文集のなかから三〇種の詩文を選び、『釈靈実集』として写しておられていて、「盧舎那像讚一首并序」はそのうちの一つです。なかには中国の年号で開元五年（七一七）という年号が入っているものもありますから、聖武天皇としては最新の中国の文章を写しておられるということになります。

ところがこの文章は非常に難しいのです。むろん全部漢文ではありますが、その冒頭を書き下ろすと、「夫れ法身は色に非ざるも、物の為に形れ、百億の閻浮は咸な示見を蒙る。七処八会に善く人天を誘い、……」となっています。

「夫れ法身は色に非ざるも」の「法身」とは、お釈迦さんの教え、つまり仏法を擬人化した抽象的な身体のことです。具体的には盧舎那仏を指しています。「色に非ざる」の「色」とは、「色即是空」の「色」と同じで、形あるもののこと。盧舎那仏は本来、姿や形がないものであるが、「物の為に」、「物」というのは仏教的に言えは「衆生」のこと、つまり人々の救いのために姿を現わされることがあるということです。ではどこに現われるのかといえは、それはありとあらゆるところだというのが、次の「百億の閻浮は咸な示見を蒙る」の意味です。「閻浮」とは、人間が住んでいる大地のことで、もとはインド半島をかたどっていましたが、華嚴思想の考え方では、そのような世界が一〇〇億もあ

る、つまり無限にあつて、そのいずこにおいても形を現わされるのだ、そのような有難いほとけなのだというわけです。

このような『華嚴経』の考え方は、二行目「七処八会に善く人天を誘い」でさらにはつきりします。「七処」というのはお釈迦さんが説法される場所のことで、それが天上界で四カ所、それから地上界で三カ所、合計七カ所ある。「八会」というのは、同じ場所で二回説法しておられるので、八回の説法座をもつたことになる。このように、一つ一つ注釈的に見ていくと大変なことになります。

いずれにしても、釈迦は盧舎那仏がどういふ仏なのかということを書いているのです。聖武天皇が写した讃というのは、盧舎那仏の画像があつて、それに寄せて書かれているわけですね。この画像のなかには、善財（善才）童子という汚れない青年が、この世の中で悩み苦しんでいる人たちを救いたい、そういう健気な心の青年も描かれている。なお、中国で善財童子を描く場合は、文字通り童子の姿で描きますが、インドではそうではありません。

では善財童子という人物は、お経のなかではどういう役割の人間なのか、聖武天皇は中国に留学して研鑽を積んだ僧侶に聞かれたに違いありません。善財童子という青年が出てくるのは、『華嚴経』の最終章「入法界品」のところでは、

そういうわけで、「盧舎那像讃」の華嚴思想との係わりで言えば、まず「法身」という言葉が挙げられます。この法身が人々を救うために姿形を現わすことがあるというのを「法身応現」と言います。次いで「七処八会」は、六〇巻本の『華嚴経』による説法座の数え方です。八〇巻本では「七処九会」と、九つの説法座ということになります。三つ目は、善財童子が出てくる物語が讃のベースになっているということです。

聖武天皇が『雑集』を書かれた年代と、『続日本紀』とを照らし合わせますと、この天平三年には、注目すべき点が二つ浮かび上がってきます。その一つは行基についての記述で、律令制では僧尼令と

いう法律があつて、出家が厳しく制限されていますが、この年の八月に聖武天皇は「行基法師に随逐ふ優婆塞・優婆夷」のみ、「男は年六十一已上、女は年五十五以上」について出家することを許しています（『統日本紀』②二四七）。

当時の税制では僧侶には税金が掛からないので、政府としてはなかなか出家を認めようとはしませんでした。むしろそれ以前では行基の活動は法律違反ということで弾圧をしておりました。ところが聖武天皇は、行基の活動こそ、人々の救済を使命とする菩薩の活動に当るとみなし、「優婆塞・優婆夷」と呼ばれる在俗信者の出家を認めました。ただし、出家に年齢制限を設けたのは、できるだけ政府の負担を軽減しようとしたからで、男の六十一歳以上というのは、六十五歳までが普通の男子の半分、十六歳以上であれば一切税金がかからない。それでも出家を認めることは画期的なことだったのです。

次に注目すべきなのは、聖武天皇が『雑集』を写し終わって二ヵ月後の十一月に、平城京を巡行しているとき、道すがら牢獄の辺を通った。そのとき囚人たちの悲しみ叫ぶ声が出てきたので、天皇は憐憫の情を掛けられ、使を遣して罪状の軽重を覆審させた。冤罪がなかったかということなのでしょう。その結果、恩情を降して、ことごとく罪一等を減じて、死罪以下を免じ、并せて新しい衣服を賜わったというのであります（『統日本紀』②二五一）。

実は、これとよく似た話が『華嚴経』「入法界品」に出てきます。善財童子はその道の先達五四人を次々と訪れて悟りとは何かを尋ねるのですが、この先達のことを善知識と言います。そのなかには僧侶や修行者もいれば女性や若い少年もいます。また人間だけでなく神々もいるのですが、その善知識の一人、ある夜の女神を訪ねたとき、女神が次のような話を聞かせてくれました。それは過去世のある王国に善伏という王子がいて、ある日、罪人たちの恐怖の叫び声を聞き、牢獄の方へ行くと、囚人があまりにも悲惨な状態に置かれていた。それで憐れみの心をいだき、彼らを釈放するよう父親の

王様に懇願した。ところが大臣たちは、「そんなことをしたら王様が殺される」と言って反対した。そこで王子は自分が身代わりとなつてその罪を背負うから、何とかこの苦難から救つてやつてほしいと申し出た。そのような話なのでありますが、この善伏王子の話を書くか読むかした聖武天皇は、おそらく非常に感動したのであります。

自分の国の牢獄では、囚人たちの状態は一体どうなっているのか。今までは考えもしなかったが、確かめたいものだとも目的を告げずに、わざわざその場所へ行って聞いてみた。やはりそうだったかと、そこで自分としての徳を示すということで、囚人の罪を軽減させ、あわせて新しい服を与えるというようなことまでした。これが、聖武天皇が牢獄を視察したときの真相だとすれば、天皇としては、自分の行動規範を『華嚴経』という經典に求めていたこととなります。

聖武天皇はこれをきっかけにして、次第に『華嚴経』あるいは仏教との繋がりを確かなものにしていかれます。すなわち天平四年（七三二）には、遣唐使の派遣を十六年ぶりに命じられますが、その重要な役目の一つが、出家者に正しい戒律を授ける「戒師」が日本にはいないから、中国へ行つて招請するようにというものでした。遣唐使と随行の僧侶は、早速、戒師を探しますが、これが後に鑑真和尚が来るきっかけになります。しかし鑑真一人だけでは足りません。授戒に立ち会う僧侶も複数要りますので、一行は適宜声をかけた。日本側の求めに応じて、では行きましようかと承知した人の一人が、長安にたまたま南インドから来ていた菩提僊那という人です。この人の伝記は「南天竺波羅門僧正碑并序」に書いてあります。このとき、菩提僊那と一緒にベトナム僧の仏徹（仏哲）という人、それから中国僧の道璿が日本にやつて来ます。天平八年（七三六）のことです。菩提僊那は絶えず『華嚴経』を誦読していたと伝記では書かれていますので、天皇としては直接にいろいろと聞かれたことであらうでしょう。

(二) 『華嚴経』理解の深化

次に聖武天皇が『華嚴経』との係わりをもたれたのは天平十年(七三八)のことです。聖武天皇には男の子がいましたが、その子は満一歳の誕生日を迎える直前に亡くなりました。将来の後継者として考えていた天皇は非常に落胆し、皇太子の菩提を弔うために、平城京の東の方に、「山房」というお寺を建てました。これは東大寺の前身寺院に当たります。その後、聖武天皇は光明皇后が新たに男の子を生んでくれるのを待ったのでありますが、もはや年齢的にも無理だということで、天平十年に阿部内親王を皇太子にいたします。おそらく女の子の立太子には反対する貴族もあつたと思います。それはともかく、阿部内親王の立太子を記念して、山房のそばに福寿寺というお寺を建てます。そのとき、男の子の菩提寺の「山房」ではあまりにも寂しい名前だということでしょうか、「金鍾(こんしゆ)山房」という名前を付けました。

この金鍾という言葉は『華嚴経』に出てくるのです。この言葉は『華嚴経』に一カ所出てくるだけで、他の経典でもめつたに出てきません。この言葉が出る箇所にはあるエピソードが語られておりまして、それは転輪聖王という、世界を治める王様が、自分の后妃から生まれた王子を立太子させるに当たり、インドの習慣として、四方の海からそれぞれ水を取って来させて、それを黄金造りの水瓶に入れて、皇太子の頭の上に注ぐというを行います。これを灌頂と言い、その黄金の水瓶のことを金鍾と言います。「金鍾山房」という名前は、『華嚴経』に出るこのエピソードに由来しているに違いありません。

次いで天平十二年(七四〇)二月に、聖武天皇は河内の知識寺というお寺に行きますが、その寺の本尊は『華嚴経』に説く盧舎那仏です。河内には渡来系の人たちがたくさん住んでおりまして、それぞれ自分たちでお金を出し合って、大きな盧舎那仏像を造つたというので、それをぜひ自分も見たいと思われたのでしょうか。この盧舎那仏は土で造つた塑像、大きな塑像であつたようです。

このようなことから、もっと『華嚴経』の内容を研究しないといけないというので、天皇の要請で、その年の十月から『華嚴経』の講義が東大寺の前身寺院である金鍾寺で行われます。そしていよいよ『華嚴経』の教えを形に示し、国民を救済する手立てにしようと考えられます。天皇の目的は立派な政治をすることであり、特に国民の精神的な支えを示すことですから、それには具体的にどうすればよいかというのが、この次に問題になるわけです。

(三) 華嚴思想の具現化

中国に長く留学し勉強し勉強し道慈というお坊さんがいました。この人は奈良にある大安寺の開基でもあります。この人が天平十四年（七四二）に聖武天皇の意を汲んで、「華嚴七処九会図」——さきほどは七処八会と言いましたが——九会ですから、新しい『華嚴経』を基にしたものですが、立派な綴れ織りの掛図を作ったということがあります。

そしていよいよ翌年十月十五日に盧舎那大仏を造ろうという詔を出されます。この「盧舎那大仏発願の詔」は非常に長く難しい漢文です。わかりやすくと思つて要点をまとめてみました。

イ 朕は即位して以来、生きとし生けるものすべての救済を心がけ、慈しみの情をもつて人民を治めてきた。

ロ しかしながら、憐れみの心は国中に及んでいるとは思ふけれども、仏法の恩徳については国土すべてにゆきわたっているとは言えない。

ハ そこで、仏法の威霊の力によって天地が安泰となり、末代までも残る立派な事業を成就させて、動物であれ植物であれ悉く栄えるようにと望む。

ニ ついては天平十五年十月十五日を期して、菩薩としての大いなる誓願を立てる。

ホ すなわち、金銅盧舍那大仏造像の大事業を行い、そのことを広く世界に呼びかけ、その趣旨に賛同する者をして我が知識（友）となし、事業を通じて、最後にはみな同じく仏の利益を受け、迷いのない悟りの境地に到達できるようにさせたい。

へ そもそも天下の富と勢いを所持しているのは朕である。その富勢をもって尊像を造ろうとすれば、形はたやすくできるであらう。しかし、それでは造像の真意が成就されたとは言いがたい。

ト ただこうした事業を行うに当たって恐れるのは、徒に人民に労苦を課しただけで、その聖なる心をわからせることができず、誹謗中傷の心を起こさせて、かえって罪に堕ちる者が出てくることである。

チ したがって我が知識として大仏造像事業に参加する者は、真に至誠の心をもって大いなる幸せを招き入れ、日に三回、「心中の」盧舍那仏を拝むとよい。この趣旨をみずからすすんで納得し、各自その心意気で盧舍那仏の造像に当たるように。

リ もし一枝の草、一把の土という、たとえわずかな力であっても、すすんで造像事業に参加しようとする者があれば許可する。

ヌ 国司や郡司ら役人たちは、この事業を理由に人民の財産を侵害したり租税を収奪したりしてはならない。

ル 遠き国にも近き国にも、国内すべての地域に布告して、朕の意図を伝え知らせるように。

〔続日本紀〕②四三二―三三三〕

この詔を見ますと、天皇の願いは、まず動物も植物も共に栄えるようにということです。人間だけが栄えるのではなく、自分たちはこの大地自然の命ある物、これを支えにして生きている、言

い換えれば動物・植物のお蔭で自分たちは生かされているのではないかという考え方です。これは人間中心ではなく、動物も植物も共に栄えるようにという、天皇の考え方を表明しています。

さらに、自分は天皇だけれども、天皇の立場での菩薩、つまり人々の救済を目指す菩薩の一人になって、大仏さまを造ろう——大仏さまを造るということは形を示すということになります——という考えですね。

それからこの自分の考えに賛同してくれる人——それを仏教的には知識（智識）と言います。普通の意味の知識ではなくて知己ということです。そのような人は自分の知識、つまり友だちというので

す。
次は原文で言うと、「事なり易く、心は至り難し」とありますが、要するに天皇としての権力を発動すれば、巨大な仏さまを造るのはたやすいかもしれないが、それでは心がこもったことにならず、ただ単なる箱ものになってしまう。何とかして大仏の造立を心のあるものにしたというのです。

この趣旨に賛同する者であれば、たとえ一枝の草、一つかみの土といった、大仏を造る事業で考えれば、まったく取るに足らないようなものであっても、拒まないようにと役人たちに諭します。つまり心をいただくことが大事なのだというわけです。

このようにして、大仏発願の詔の内容を克明に見ていきますと、そこには『華嚴経』を単なる政治思想の拠り所とするのではなく、その理想像を現実の世界に実現しようという、最高主権者としての強い意志が感じられます。しかも詔のなかで注目したいのは、造像事業の趣旨に賛同する者をみずから友と呼び、ともに迷いのない悟りの境地に到達しようではないかと呼び掛けていることです。

奈良時代の天皇というのは、即位の宣言文にありますように、先祖の神々が形を現わされた現神（あきつかみ）、現人神として天下の公民（おほみたから）に臨まれるという、民とは隔絶した存在です。天皇と民はまさしく隔絶した上下の関係にあるわけです。

ところが聖武天皇は華嚴思想を拠り所に、大仏造立の趣旨に賛同する者を朕が友と呼び掛けられた。友達ですから横並びです。上下の關係ではなくて、水平の平等な關係になる。上下の立場を越えて、みな平等に悟りの世界に進もうではないかというのです。

この当時、この詔の趣旨を一番よくわかったのはおそらく行基さんだったでしょう。かつて行基さんは政府の弾圧の対象でありましたが、それを聖武天皇は改めさせた。そういう恩義もあると思われませんが、行基は天皇のおっしゃることは素晴らしいことなのだ、民衆のなかに入って説いて回ったと言われています。

その結果、聖武天皇の趣旨を理解して、材木など品物を寄進した人が五万一千五百九十人。役夫の知識、いわば労働奉仕者が一六六万五千七百人。端数がちゃんと書いてあるというのは、何か資料が残っていたということでしょう。金の知識人、お金を寄進した人が三十七万二千七十五人。国家の命令で地方から特殊な技能でもって働く役夫が五十一万四千九百二人。全部合わせるとおよそ二百六十万という人が何らかの形でこの大仏造立に係わったということです。二百六十万人は、当時の日本の人口のおよそ半分にあたると言われています。

こうして巨大な大仏が姿を現しつつあるとき、大安寺では華嚴院という別院が建てられ、そこには巨大な盧舎那仏の画像、高さ三丈といえますから、およそ六メートルの盧舎那仏の画像が制作され、あわせて両脇には、それぞれ三メートルもある千手観音と不空絹索観音の巨大な画像が制作されました。盧舎那三尊像ができあがっています。

(四) 歓喜と感謝

さて、大仏の制作は順調に進んでいきますが、盧舎那仏という大仏さまは、宇宙いっぱい光り輝いている仏ということがありますから、そのことを示す意味で全体を金で覆わねばなりません。鍍金

をしなければならぬのです。ところがこの時代、日本には金が出ないと言われていました。かつて対馬で金が出たという話がありましたが、これは実は贗物だった。もし輸入するとすれば大変なお金がかかりますから、何とかして日本で金を見つけないといけない。いろいろ探索をさせたと思えます。何と大仏がほぼ出来つつあるときに、陸奥国、今の宮城県で金が発見されたという知らせが宮廷に届きました。聖武天皇が目をかけていた百済系王族出身の国司、百済の最後の王から数えると四代目の孫、百済王敬福という人が発見して、黄金九〇〇兩を献上いたします。

聖武天皇はこのことに非常に喜ぶとともに、感謝の気持ちでいっぱいになった。なぜかと言うと、今まで自分としては一生懸命政治をやってきたが、天地自然はそのことに報いてくれるどころか、日照り、飢饉、地震、天然痘の流行といった、過酷な試練を与えてばかりいた。ところが、この度は、初めて自分の願いに応じて、地中から金を出してくれた。これはひとえに自分が盧舎那仏に帰依した結果なのだ、そのように理解されたからであります。

そこで黄金産出の知らせを受けてからおよそ二ヵ月後、天平二十一年（七四九）四月一日に、未完の大仏さんの前に行つて、「三宝の奴と仕え奉る天皇が……」ではじまる長文の詔を読み上げられました（『続日本紀』③六五―七三）。それはまさしく聖武天皇による歓喜と感謝を捧げる言葉でした。

実はこのとき、天皇は光明皇后や皇太子の阿倍内親王、それに左大臣の橘諸兄以下、文武百官を従え、盧舎那仏に向かって立たれるのですが、それは天皇が北面されたということです。天皇というのはかならず臣下の方へ向かって南面して立つものです。それが初めて、みんなと同じように北面して並べられたのです。

盧舎那仏への感謝の念が如何に強かったかは、「三宝の奴」の詔に続いて読み上げられた第二の詔によく表れています。この喜びを自分一人だけで味わうのではなく、みんなとともに分かち合いたいと言われて、それぞれの立場に応じて位を上げたり、褒美を与えたりされたからです。

それからもう一つ、黄金産出という瑞祥を好機として行ったことに、みずからは讓位して、娘の皇太子を即位させたということが挙げられます。これまで元明、元正という、自分の前二代にわたって、女性天皇がいたわけですが、女性を皇太子にしたのは初めてのことであり、女性天皇をよく思わない勢力もありました。元正天皇が聖武天皇に讓位して二十四年が経過し、太上天皇となっていた元正天皇が亡くなると、聖武天皇に讓位の可能性が生まれます。すると女性皇太子が即位するかもしれないと危機感をいだいた反対勢力は、匿名の投書を宮城に投げるという手段に訴えました。当時の法律では、匿名の投書によってある人物を非難した場合、投書をした者は罰を受けることになりました。しかし、このときの投書は特別な人物を非難しているのではなくて、政治そのものを非難したものであったようで、それは要するに女性天皇を認めないということだったのでしょう。聖武天皇は若い官人や大学生を集めて、将来を戒めたと言われています。

このような政治状況を踏まえて、聖武天皇は讓位を考え、それを確実なものにするために出家いたします。聖武天皇には、出家するからには政治を執つてはいけないという考えがあつたようで、このような考え方は『華嚴經』に出ていますので、それに基づかれたかもわかりません。出家即讓位という方針を立て、一挙に阿倍内親王を即位させるということをやり遂げます。こうして孝謙天皇が誕生します。このときの政治的判断の鋭さは見事なものです。

二、盧舎那仏は光で語る

(一) 盧舎那仏（毘盧遮那）は光のほとけ

それでは聖武天皇がこだわった盧舎那仏とは、一体どういう存在なのかということをお話させていただきます。ただきたいと思えます。

謂では盧舎那仏という名前が使われていましたが、また別に「毘盧遮那」という言い方もあります。いずれも、もとはインドの言葉でいうヴァイローチャナ Virocana をただ音写しているのですが、盧舎那仏は六〇巻本の『華嚴経』での音写、毘盧遮那は八〇巻本の音写です。このヴァイローチャナを中国では「光明遍照」と訳しました。すでに申したように、光を宇宙いっぱい輝かせているお方ということですよ。

(二) 釈迦即毘盧遮那

この毘盧遮那仏という仏はどうして生まれたかということ、もちろん『華嚴経』は大乗仏典の一つですから、大乗仏教が生まれるころ、仏教徒は以下のように考えていたということで申し上げます。仏教をはじめたお釈迦さんは、今から二五〇〇年ほど前、インドの小さな国、カピラヴァストゥという国の王子に生まれました。ところが成長につれ、人間とは何かについて非常に悩むようになった。なぜ悩んだかといえば、自分の母親が産後の肥立ちが悪く、一週間後に亡くなったということに、大きな原因があるでしょう。

お釈迦さんの教えの基本は、生老病死を四苦と捉えることです。ごく普通の人間には当たり前のことでも、お釈迦さんにとってきわめて深刻だったのは、母親の死の原因が自分にあると悩んだからでしょう。

いったんそういう悩みを持ちますと、どうにも解決の方法が見つかりません。こうして人間存在について悩み、結婚して子供が生まれても解決が付かず、それで二九歳のときに出家する。六年間修行したが、苦行を重ねても何の意味もないというので、それを捨てて瞑想に入る、つまり座禪を組んだ。そして二週間後、一つの大きな心の変化が生まれた。いわゆる悟りという体験です。

古代インドの仏教徒は、お釈迦さんの悟りとはどんなものだったかを追究するうち、最晩年に説か

れた教え、自分の肉体は減んでも、自分が説いた教え——これは法、ダルマと言いますが——これは減びることはないと言われていましたので、これを根拠に、お釈迦さんの法、ダルマは永遠に減びることはないと考え、この法を擬人化、つまり法に人格を与えて法身と呼び、歴史上の釈迦を、肉体を持った身体ということで「色身」と呼びました。そのように、釈迦についての身体を考えることを仏身論と言います。

その後、北インドでは北方から次から次へと異民族が侵入してきます。人々は混乱のなかで大変苦しむ。お経では五濁悪世といわれる、大変な時代を迎えます。この苦しんでいる人たちを何とかして救おうではないかということで、菩薩という一団のグループが生まれます。その菩薩のなかから、お釈迦さんと同じように悟りを開き、それを抛り所に人々を救いたい、というグループが出てきます。そういう人たちの考えが、やがて『華嚴経』という大部な経典にまとまっていくわけです。大体紀元後二世紀から四世紀にかけてだと言われております。

要するに、この『華嚴経』は人々の救済を使命とする菩薩たちのために説かれた経典であるということです。そうだとすれば、ここでいう菩薩たちは、お釈迦さんをどのような存在であったと考えていたか、一つの見方が出来てくるわけですね。お釈迦さんは人間とは何かと苦悩し続けた。悩むということは、心のなかは暗闇だということですね。ところが、修行を重ね、そして座禅を組んで瞑想に入り、二週間後のある朝、突然、真っ暗な自分の心のなかに一条の光を見出した。それがだんだん大きくなって、やがて自分の身体全体がその光に包まれ、さらにその光は自分の体から外へ出て、そして宇宙いっぱい輝きわたった。『華嚴経』の菩薩たちはお釈迦さんをそのような存在だと理解したということになります。

要するにお釈迦さんは、暗闇から光への変換を果たしたばかりでなく、宇宙への拡大を体験したのだと。これまで仏教徒は、お釈迦さんの法は永遠であるということから、その法を人格化した法身と

いう存在を生み出したが、『華嚴經』の説く菩薩たちは、ただ単にその法身を時間的な意味だけでなく、無限大の存在として空間的な意味でも理解したということです。それが宇宙いっぱい光輝くピルシヤナ仏の意味なのです。

なお付け加えれば、この仏身論はやがて仏陀を三つに分ける三身論に発展しますが、『華嚴經』はそこへ行くまでの二身論の時代の經典です。

六〇巻本にしろ八〇巻本にしろ、『華嚴經』を紐解くと、そこには時間的にも空間的にも、物事をすべて無限に拡大拡散して突き詰めて考えるという世界観が横たわっています。たとえば、お釈迦さんの修行は六年間でした。しかしその六年間というのは、地球上の絶対時間の話であって、宗教的には無限の時間に当るといわけです。釈迦は無限の修行を積んで初めて悟りを開かれた、と考えるのであります。お釈迦さんが説かれたインドでの説法座について言えば、単にインドだけではなく、その教えはもっと広がった場所、言い換えれば宇宙的世界にまで広げて考えるのです。それは世界中に広がる可能性を秘めた普遍的な思想なのだと、ことを予想しての話なのでしょうか。『華嚴經』を中心として、大乘經典では、何とこの世界を「三千大千世界」と言いまして——これは現在の天文学で言うと、地球を飛び越え、太陽系の世界が無限に存在する銀河系宇宙に当るのですが、——そういう無限の世界で説法されているという考え方にまで発展します。

お釈迦さんが説法を始めると、釈迦の発する光が三千大千世界と言われる無限宇宙の十方世界——東西南北とそのあいだの四維、それに上下を加えた十方——宇宙のはるか彼方に届き、どうも地球世界では釈迦が何か素晴らしい説法をするようだということで、それぞれの方角の宇宙世界に住む菩薩たちがその世界の仏さまの許しを得て、地球世界の釈迦の説法を聞きに舞い降りてくるというのであります。何とも不思議なお経であります。

大事なことは、たとえ毘盧遮那仏、あるいは盧舎那仏がそのような隔離した宇宙的存在であって

も、決して元のお釈迦さまを離れては存在し得ないという考え方に立っているということ。華嚴思想ではこれを「釈迦即毘盧遮那」という言い方で表明します。どうということかと言うと、一神教の神さまのような絶対的他者ということではなくて、悟りを開いた人間釈迦を離れては、毘盧遮那は存在し得ないということなのです。

仏教でも考え方が発展してくると、毘盧遮那の前に大を付けて「大毘盧遮那」という如来を考え出します。いわゆる大日如来のことです。名前がよく似ているので、混同されやすいのですが、これはお釈迦さんとは切り離れた、宇宙の真理そのものと考えられるほ、とけで、密教的な仏教の考えによっています。華嚴の場合はそうではなくて、あくまで人間を離れては存在しないということで、人間の究極の可能性を追求していると言ってよいでしょう。要するに究極の、無限の修行をした菩薩は、お釈迦さんと同じように光を発する、そういう存在になれるのだと考えており、そのような存在の菩薩として、普賢菩薩を登場させます（注参照）。

それから『華嚴経』では、光として拡大拡散する場面をよく描きますが、しかし拡大ばかりを説いているわけではありません。実はその逆のことも説いています。縮小して宇宙がお釈迦さんの毛孔のなかに入ってしまう、というようなことを説くのです。お釈迦さんの毛孔はいわば宇宙でいうブラックホールです。結局のところ、大きなものが小さくなる、小さなものがまた大きくなるという宇宙の生成と消滅を説くのです。

このようなことをまとめて、華嚴思想では「一即一切、一切即一」であるとか、「一即多、多即一」であるとか、言い方をします。これはすべて物事を究極に突き詰めて考えていくとどうなるのかという、ものの見方を示したものです。そこで浮かび上がってくるのは、世界のあらゆる事物、あらゆる存在は無限に繋がっているのだという考え方です。お釈迦さんはそのように無限に繋がった世界のなかで絶えず説法され、大いなる清らかな世界を形作っておられる。そのような華嚴の思想を見事に表

現したのが、東大寺の盧舎那大仏が座っておられる蓮華座の蓮弁図「蓮華蔵世界図」です。

三、一つがすべてであるという思想

(二)『華嚴経』

『華嚴経』のなかには、実に不思議な言葉がたびたび登場します。そのいくつかを紹介しましょう。

① 一つの毛孔のなかに、無数の仏の国土が装いも清らかに飾られて、広々と安住している。

……一つの微塵のなかに、あらゆる微塵の数に等しい微細な国土がすべて入っている。(盧舎那仏品、四一〇頁)

② 「初めてさとりへの心を発す菩薩は」微細な世界が広大な世界であり、広大な世界が微細な世界であると知り、……一つの世界が無数の果てしない世界であり、無数の果てしない世界が一つの世界であり、無数の果てしない世界が一つの世界に入り、一つの世界が無数の果てしない世界に入ると知り、……一つの世界から一切の世界を生みだすことを知り、一切の世界はあたかも虚空のようなものであると知ろうとし、一念に一切の世界を完全に知り尽くそうとするので、無上のさとりへの心を発するのである。……

長い劫(カルパ)は短い劫であり、短い劫は長い劫であると知り、一劫は数うべからざる阿僧祇劫であり、数うべからざる阿僧祇劫は一劫であると知り、……無量の劫が一瞬間であり、一瞬間が無量の劫であると知り、一切の劫が無の劫に入り、無の劫が一切の劫に入ることを知ろうとし、ことごとく過去・未来、および現在の一切世界の劫数の増減を知り尽くそうとするので、無上のさとりへの心を発するのである。(初発心菩薩品、四五〇―五一頁)

③ 一はすなわち多であり、多はすなわち一であると知り、味に随って義理を知り、義理に随って味を知り、非有は有であり、有は非有であると知ろうとする、……なぜなら、あらゆる真理において手段を備えておこうと思うためである。…（菩薩十住品、四四六頁）

④ なぜならば、如来は自らの一身をもって一切世界に遍満させたり、莊嚴したあらゆる仏国土を自らの一身に入れたり、……一毛孔のなかにあらゆる世界の成立・存続・壊滅・空無を影現したりすることができる不可思議な力をもっているからである。（入法界品、六七七頁）

（二）哲学者と文学者

「二即一切、一切即二」という言葉は、『華嚴経』の思想を特徴付けるものとしてよく言われますが、一つがすべてであり、またすべてが一つであるという思想は、何も『華嚴経』に限った考え方はないようです。世界のいろいろな思想とか神秘的体験とかを見ていくと、同じような言葉が浮かび上がってきます。

ごくわずかながら例を挙げるとすれば、プロティノスというヘレニズム時代の哲学者、それから英国の詩人がおりますし、日本人では与謝野晶子が印象に残ります。同じような言葉はイスラムの場合でも見出すことができるのです。

プロティノス（二〇五～二七〇）は新プラトン派の始祖で、アレクサンドリアで学び、のちローマで私塾を開いた人です。彼の著作集『エンネアデス』のなかに次のような言葉があります。

「あちらではすべてが透明で、暗い翳りはどこにもなく、遮るものは何一つない。あらゆるものが互いに底の底まですっかり透き通しだ。光が光を貫流する。一つひとつのものが、どれも己の内部に一切のものを包蔵しており、同時に一切のものを、他者の一つひとつのなかにみる。だ

から、至るところに一切があり、一切が一切であり、一つひとつのものが、即、一切なのであって、燦然たるその光輝は際限を知らぬ。ここでは、小・即・大である故に、すべてのものが巨大だ。太陽がそのまますべての星々であり、一つひとつの星、それぞれが太陽。ものは各々自分の特異性によって判然と他から区別されておりながら（従って、それぞれが別の名をもっておりながら）、しかもすべてが互いに他のなかに映現している。」（『井筒俊彦著作集』9 所収一三三頁）

まるで『華嚴經』の経文を見るような言葉ですが、これは彼がみずからの神秘体験を語ったものと言われています。華嚴思想が勃興する時代のインドとの何らかの繋がりがあったのでしょうか。

次はウイリアム・ブレイク（一七五七―一八二七）というイギリスの詩人の詩の一節です。

「一粒の砂のなかに世界を見る

一輪の野の花に天界を見る

汝の手のひらのうちに無限を

一ときのうちに永遠をつかみ取れ」

「淀んだ水は腐る

多忙な蜂はくよくよする時間を持たない

真の愛は我れを忘れて他を救うことだ

みずからの翼で翔べ

愚かな狐は自分を責めないで罫を責める

一瞬の思いが無限を満たす」（並河亮『私の華嚴經人生論』三八―四二頁、一部改訳）

ウイリアム・ブレイクの生きた時代とイギリスという世界地図上の位置を考えると、一粒と世界、一ときと永遠という、一即一切の対比の観念は、この詩人独自の発想なのでしょうか。

次は与謝野晶子（一八七八―一九四二）が、大修理が行われていた明治期の東大寺大仏殿を訪れたときに詠んだ歌です。

劫初よりつくりいとなむ殿堂に われも黄金の釘ひとつ打つ

案内の東大寺僧から話を聞くうちに、直感的に歌が浮かんだのでしょうか。

（三）極限への視点

長々と話をしてきましたが、要するに華嚴思想がもつとも強調する極限への視点は、二つの重要な概念を導き出しているということです。その一つは無限の相関性です。具体的な事物や事象はむろんのこと、たとえそれが対立するように見えても、時間も含めて、あらゆるものは孤立した存在ではなく、他のすべての存在と限りなく繋がっているということです。あらゆるものはみんな繋がっているのです。しかも、それはさらに全体としても係わり合っているということです。

この繋がりとというのは、じつと静止的に理解すればたやすいかもしれませんが。しかしよく観察すると、この有機的な繋がりは、時間の経過、動きのなかでも観られるのです。つまり個々のものは、全体として互いにはたらき合ってもいると言えるでしょう。無限の相関性は、単に静態的な意味においてだけでなく、動態的にも言えるのです。このように一体不離である関係性のことを華嚴教学では、「相即相入」と言いまして、前者は「体」の視点から、後者は「用」の視点から事象を把握した場合

を指すとします。このような縁起のあり方を「法界縁起」というのです。

こういう無限の繋がりというのは、理論上ではわかりえても、実感としては疑問に思うかもしれません。しかし、考えてみれば自分の存在、自分という人間はたった一人では生きていけないですね。みんな大勢の人々のお蔭、あるいは動物も植物も含めたあらゆる存在物のお蔭で生きていけるわけです。そのように考えれば、全部繋がっていることがわかります。

このような繋がり視点をもつと宇宙的に広げて行けば、例えば、現在地球が置かれている環境の問題であるとか、あるいはもつと政治的な視点で言えば、核廃絶問題であるとか、さまざまな要素がすべての点で繋がっている。この繋がりをどう処理していくか。あるいは矛盾をどう克服していくか。この点強調すべきは、自分だけの世界に止まるということではなくて、全部の世界を視野に入れて物事を考えるべきだということです。この『華嚴経』の教えはそうしたことを説いているのではないかと思います。

それから極限への視点が指摘するもう一つ概念は、両極限の相対化ということ。一がすべてというのは、考えてみると、どちらも全く相反する事柄です。心の問題で言うと「煩惱即菩提」となります。煩惱というのは、苦しみ悩みです。それがなぜ即菩提、悟りとなるのか。これをもしどちらについても実体的な、あるいは実在的な実体として捉えるということであれば、数学的に見てのイコールとはならないでしょう。つまり、あらゆる事象の無限の相関性をまったく相反する事象にも認めるには、実体と捉えられるものは何一つとして存在しないという透徹した見方が根底になければならないということです。そのような見方を仏教では「空」というのです。この世には絶対的なものは存在しないと考えて、初めて可能になる話です。すなわち両極限を相対化することです。空を意味する梵語のシューニヤśūnyaは数学のゼロと同じ語で、ゼロの觀念が発見されたことよって、1や2といった個数としての絶対価値はプラス1やプラス2に対するマイナス1やマイナス2

といった相対価値に変換されました。このような関係性を一般的な事物や事象にも認めるといふことなのです。

このような極限への視点を基盤とした空観に立てば、現実的な現象世界にあつて、相対立する二項が想定されても、二元論は消滅の運命にあるはずです。極限への視点は、一見矛盾する諸要素を通底可能な要素に変換させる普遍的な思想だと考えられます。現代を生きていくうえでの政治的な動きも含めて、われわれが経験しているあらゆる分野において、相互依存の関係が成立しているのだということを経験してみんなが考えてもらえれば、私としては幸いであります。ご清聴ありがとうございます。

(注) 「善財童子はいつのまにかあの金剛藏菩提道場のビルシヤナ如来の獅子座の前にいた。ビルシヤナ如来は金色に輝いておられた。善財童子は坐る。精神を集中する。虚空界に等しい広大な心、一切法の境界に障りなき無礙の心、菩提道場の莊嚴を観ずる清浄な心、一切劫に住して尽きることなき無限の心、その無量の心をもつてどつしりと坐つた。善財童子の過去の善根と普賢菩薩の過去の善根とが二重写しのようになつた。一切如来の威神力によるのであろうか。すると突然、清浄なる仏国土が現れ、続いて大光明が現れたのである。一切世界の一々の微塵のなから、一切のみ仏の光明雲が放たれ、実に様々な、幾百千の色光を伴つて法界全体に遍満した。一々の微塵からはまた香雲が放たれ、あまねく法界を薫じ、普賢菩薩の功德海を讃嘆した。それだけではない。一々の微塵から日月星雲が現われ、普賢菩薩の光明を放つて法界全体に満ちた。

これらの大光明は普賢菩薩にまみえる兆しだったのであろうか。善財童子は一心に普賢菩薩を念じ、普賢菩薩の境界を求め、普賢菩薩にまみえたいと不退転の決意をもつて念じ続けた。すると、まるで霧が晴れるかのように、ビルシヤナ如来のかたわら、宝蓮華の獅子座に坐り、菩薩衆に囲まれ、説法されている普賢菩薩のお姿が善財童子の眼前に現れたのである。

普賢菩薩は一々の毛孔から一切世界の微塵数に等しい光明を放ち、法界の極みに至るまで、一切世界を照らして衆生たちの苦患を取り除かっていた。普賢菩薩は一々の毛孔、それに両肩先から、一切仏国土の微塵数に等しい華雲を放ち、一切如来の説法会に華々を雨降らせていた。…：一切衆生を無上のさとりに向け教化されておられた。菩薩の化作雲を放ち、一切衆生の善根を養うため、一切如来の名号を唱和させておられた。一々の毛孔から普賢菩薩の雲を放ち、法界に甘露の法を雨降らして、一切衆生の願いを満たし、一切智への歓喜を促しておられた。」（森本公誠『善財童子求道の旅』）

（編集者注…本稿は、平成二十一年十月十日に開催された、モラロジー研究所道徳科学研究センター主催の「公開講演会」の内容を収録したものである。）